

第3回 夜間中学等に関する協議会ワーキンググループ 議事録

日 時 令和6年2月8日(木) 15時00分～16時30分
場 所 北海道庁別館10階 労働委員会会議室

1 開 会

【事務局：上野課長補佐】

定刻になりましたので、ただいまから第3回夜間中学等に関する協議会ワーキンググループを始めさせていただきます。事前の説明等させていただきます、義務教育課の上野です。よろしくお願いいたします。本日は、会場に集合とZoomの併用で開催させていただいております。

では、次に、本日出席のワーキンググループの構成員について、変更のあった方をご紹介します。

函館市教育委員会教育政策推進室教育政策課長 榎田様。Zoomでのご出席です。旭川市教育委員会学校教育部教育政策課主幹 田村様。Zoomでのご出席です。釧路市教育委員会学校教育部次長 森様。Zoomでのご出席です。北海道総務部教育・法人局学事課学務調整担当課長 大久保様。最後に、北海道教育庁学校教育局義務教育課 遠藤課長です。

本日は、オブザーバーとして、札幌市立星友館中学校校長 工藤様にご出席いただいております。

次に、本日の出欠について確認させていただきます。欠席者は、札幌市教育委員会学びのプロジェクト担当課長 田中様。北海道大学大学院教育学研究院教授 横井様の2名です。

次に、本日の資料を確認させていただきます。次第が1枚、資料1「オンライン授業の課題に対する検討について」が表紙を含め4枚、資料2「他県の夜間中学における授業時間等の設定について」が2枚、資料3「夜間中学における教育課程の工夫等について」が1枚です。その他、参加者名簿、会場図になっております。

次に、本日の議題ですが、次第に記載のとおり、協議事項が2つ、「オンライン授業の課題に対する検討について」、「本道の地域特性を踏まえた夜間中学の在り方について」になります。

終了時刻は、16時30分としております。説明最後になりますが、会場にお集まりの構成員の皆様におかれては、発言の際にはテーブル中央のマイクに向かって少しゆっくりめをお願いいたします。それでは議事に入らせていただきます。進行を、義務教育課の遠藤課長が行います。

【遠藤直俊構成員】

義務教育課の遠藤でございます。本日はご多用のところご出席いただきありがとうございます。皆様には、日々、本道の教育の振興にお力添えをいただいておりますことに心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

夜間中学等に関する協議会ワーキンググループは、昨年11月に実施しました協議会における協議におきまして、オンライン授業を有効に活用した就学機会の提供についてのご意見や、道内の教育委員会での夜間中学の設置検討に向けた現状や課題などを踏まえまして、今回は具体的な対応策、改善策など深掘りをしていただくなど、より実効性のある取り組みに向けて、協議を進めていくことを目的として実施するものであります。

さて、本日の協議内容に関わっては、昨年12月28日に中央教育審議会の特別部会、義務教育の在り方ワーキンググループから「義務教育における今後の学校の在り方についての基本的な考え方の中間ま

とめ」が示されており、その中の一つとして、「学びにおけるオンラインの活用」が重要視されております。その中で、必要な方策の「オンラインを活用した学びへのアクセスを保障するための取組」において、義務教育未修了者・形式卒業者への対応の具体的方策として、『義務教育未修了者、形式卒業者への対応として、授業を欠席した者や夜間中学への通学が困難な方に、可能な限り学ぶ機会を提供し、夜間中学への学びにつなげていくために、対面による授業を原則とした上で、夜間中学の授業配信を受けることは可能であることを周知する。』と示されております。

また、夜間中学の設置に関わりましては、昨年6月16日に閣議決定されました教育振興基本計画におきまして、全ての都道府県、指定都市に少なくとも一つの夜間中学が設置されるよう促進するということが明記されておりました、その指標として、夜間中学の設置数の増加が掲げられておりました、全都道府県、指定都市にそれぞれ1ヶ所ずつ設置することが、5年後の目標値として、設定をされております。

こうした国の動きも含めまして、皆様には広域な本道における学びの機会の充実に向けまして、それぞれのお立場から忌憚のないご意見をいただきたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、まず協議の一つ目、オンライン授業の課題に対する検討についてでございます。

昨年10月に、星友館中学校と札幌遠友塾、釧路くるかいの皆様にご協力をいただきまして実施しました、オンライン授業の試行実施の結果については、前回の協議会の中で、ご報告をしたところです。対面ではない授業で、会場の受講生のサポートの仕方が課題として、つなぎ役の職員を置いて、オンライン授業の試行を行ってみたいところでご意見をいただきました。

本日は、ワーキンググループということで、より具体的にということを考えましたので、そのときの授業を実際にご覧いただきながら、改善策やご意見をいただきたいと思っております。当日の試行実施のときにもお立ち会いいただいた方もいらっしゃいますけれども、改めてダイジェスト版ということで、短く編集したものを、事務局からの説明を添えながら、ご覧いただきたいと思っております。

2 議 事

(1) 協議事項 「オンライン授業の課題に対する検討について」

【事務局：上野課長補佐】

画面を切り替えますので、少々お待ちください。

これからご覧いただくのが、札幌遠友塾のみなさんが、星友館中学校の桑原先生からオンラインで国語の授業を受けている様子になります。当日の授業の流れが、資料1-1になります。資料1-2が、当日、受講生のみなさんが使用したプリントの一部になります。

まず、会場の様子を少し説明します。今、映っているのが、札幌遠友塾のみなさんがいる札幌会場で、画面向かって左側に座っている方がスタッフ、右側が受講生になります。隣同士で座って授業を受けています。正面スクリーンが、星友館中学校の桑原先生です。そして、前方左側のモニターに写っているのが、釧路自主夜間中学くるかいの学習者、スタッフがいる釧路会場の様子です。星友館中学校の先生にも、札幌会場、釧路会場の受講者の様子は、見えるようになっていますが、音声については、札幌、釧路会場からともに、手持ちのマイクで話した声のみ聞こえるといった状況で、受講生のみなさんが相談しているときのざわざわした様子や、先生の説明に笑いが起こったときの会場の様子までは、桑原先生には届いていません。途中からマイクを持って話している職員が登場しますが、桑原先生と受講会場のつなぎをする、授業サポート役の職員になります。

映像は、前半、後半と2回に分けてご覧いただきます。まず、前半、ご覧いただく授業の内容についてですが、資料1-1をご覧ください。四角で囲われている「今日のめあて」として、先生が川柳を説明している様子と、四角で囲われている2つ目、「まなび」のぼつ（・）の3つ目、「俳句との違いを説明する」で、俳句の特徴である「季語」の説明をする場面になります。資料1-2のプリント①を使って、○（まる）2つ目、「俳句との違いは何？」の箇所を学習している様子になります。それでは、前半3分半ほどですが、映像をご覧いただきます。再生します。

（オンライン授業の動画再生）

次に、後半ご覧いただく内容を説明します。資料1-1をご覧ください。「まなび」のぼつ（・）6つ目、「いくつかの川柳について、ヒントをもとに最後の2～5音を予想。予想した答えを発表する。」場面になります。予想する問題は、資料1-2の裏面、プリント② サラリーマン川柳の①と②になります。受講生の皆さんが、考えている様子、つなぎ役の受講サポート職員がヒントを説明したり、受講生の皆さんの作業の進捗を見て回り、発表する場面をご覧いただきます。それでは、4分ほどの映像になります。再生します。

（オンライン授業の動画再生）

オンライン授業の様子は、以上になります。

【遠藤直俊構成員】

今、オンライン授業の様子をご覧いただきました。後ろからビデオで撮りましたので、受講されている方の表情等をご覧いただけなかったですけれども、大変、楽しそうに取り組まれていたのを、私も拝見させていただきました。

それでは、一部ではありますけれども、ご覧いただきましたので、前回協議会でオンライン授業の開催結果報告資料ということで、資料1の4枚目はまた同じものになりますけれども、参考資料としてお付けしておりますので、これもご覧いただきながらご意見等いただけたらと思っております。初めに、北海道大学の木村名誉教授からお話をいただきたいと思うのですが、前回の協議会のときには、オンラインの活用というのは北海道教育全体の課題であることですか、サポーターの確保としては、生涯教育の観点から社会教育も含めて広い土俵で議論をというようなご意見をいただいたところですが、授業を見ていただきましたので、その辺りからご意見をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

【木村純構成員】

私は、オンライン授業というものは、オンラインでやること自体に意味があるということももちろんあるし、遠隔教育として重要なツールだということがあると思います。遠隔授業として考えたときに、1人で学ぶという場合が多いわけですね。そのときに、1人で学ぶとしたら、例えばスタッフ、先生と多分生徒1人ではなかなかうまくいかないの、スタッフがいないといけないのですが、大体それはどれぐらいであれば、このレベルは多分なかなか難しいと思うけれど、それなりに成り立つレベルを実現するためには、どれぐらい必要なのか、どうしたらできるのかというのはすごく大事で、検討

しなければならぬことだと思えます。いろんなやり方があって、夜間中学のことはあまりわかりませんが、例えばイギリスだとオープンユニバーシティの場合は、地方にチューターという学生たちが集まったときに進行するすごく大事な役割を、多分教員免許を持ったような人達が、全国に何千人もいて、その人たちがやっていたりするというものもあるし、10年ぐらい前にモンゴルに出張したことがあります。そのときは、通信衛星を使って、テントごとにアンテナが立っていて、子どもたちはコンピュータの画面を見て勉強するという、そういうことも将来的には考えなければいけないと思うので、今回の実践のような素晴らしい取り組みをどうやって実際に北海道の中で応用できるのか、スタッフやシステムの構築について外国の事例も含めて、先生の意見だとか、スタッフの意見だとか、参加者の意見も今まで検討されてきていますが、さらにお聞きしながら考えていく必要があると思えます。

【遠藤直俊構成員】

やはり1人で学ぶというのが理想的なところかと思えますが、なかなかオンラインでは難しく、当然スタッフの必要性ということで、今、他国の事例も含めてご紹介をいただき、ご意見をいただきました。

それでは、学校種は違いますけれども、学校現場からということで北広島高校の岩崎校長先生から、感想も含め、お話いただけますか。

【岩崎弘之構成員】

高校の場合も、コロナ禍を通じて現在も、インフルエンザで出席停止になった生徒は、希望があれば、オンラインと呼んではいるのですが、要は生中継ですね、Zoomですとか、iPadのようなものを教室に三脚で立てまして、それを自宅にいる生徒が繋げることによって視聴することができる。話しかけたり、双方でのやりとりというものも、やろうと思えばできるかと思うのですが、なかなか実際には教室にいる生徒たちの方がメインなので、それを生中継で見ているというようなスタイルが多いのかなと思えます。それで、オンライン授業と伺ったときに、例えば、このプリントの右の方にある何行目って言われても、なかなかピンとこなかったり、私もやっぱりこれでいいのと隣近所の人に聞きたくなるというところがあると思えます。

それで、これは一昔前になるかと思うのですが、よくデジタルカメラのようなもので現物を投影して、それが相手に映るというようなことがあったりして、一昔二昔前の技術かとは思いますが、実際にここだよというものが、参加している生徒さんの方にも画面を通じて見えるということが、すごく安心感があるように思っていました。先ほどそのようにされていまして、最先端のというわけではないかもしれませんが、やっぱり見てわかるということが大事だと思いました。

それと、サポート役の先生がいらっしゃったかと思うのですが、あの方が上手いことサポートして、「大丈夫ですか」「わかりましたか」というような声かけをされていて、先ほどと重複するかもしれませんが、私がもし生徒で参加していたならば、実際に書く欄はここでいいのかとちょっと隣近所を見て確かめたいということがあるのですが、そのあたりをそこにリアルにいらっしゃる先生が上手いことサポートされているところの安心感というのはすごいなと思いました。

最後の方は、お二人目、三人目だったのでしょうか、最後に学生の方が「妻」と回答されて、それを取り上げられたときに隣にいらっしゃる学生の方は、肩を叩くようなシーンがあったかと思うのですが、叩くとか話しかけるだとか、雑談は、無駄なように見えるときもあるかと思うのですが、それは学校での集団での学びであって、物を落としたときに拾って、「はい。これね。」とかというようなものも含め

て、ちょっとしたボディータッチというか、それは意図的にやってできるものではないなと思いますので、みんなで学ぶという集団で学ぶということは、それはあの先生が画面を通してであろうが、教壇の上に立ってであろうが、同じような学びになっているのかなというように思いました。非常に楽しそうだなという思いを持ちました。

【遠藤直俊構成員】

オンライン授業ということですから、実際にライブで配信するということに意味はあるのですけれども、もう一方で、ICT 機器の活用ということであれば、視覚的な効果があるということで、今、実物投影機的使用の説明もいただきましたけれども、言葉で説明するよりも、一瞬で見てわかるというようなことでいくと、モニターを使った指導というのは効果的であるというようなことも含めてご意見いただきました。

それでは、Zoom で参加されている方からも思っていますが、函館市教育委員会の榎田課長、令和3年度から協議会やワーキンググループにおいてオンライン授業について協議を重ねて、この試行実施も今回2回目ですけれども、オンライン授業について、有効性も含めて、ご感想等いただきたいと思えます。

【榎田朝子構成員】

私も見せていただいて、皆さんが大変楽しそうに授業を受けていらっしやっただので、オンラインで授業をライブ配信することによって、その場に行かなくても学ぶことができるというのは、大変有効性が高いなというように感じました。

その中で、岩崎校長先生もおっしゃっていたのですが、授業の補助をしてくれた方の役割が大変重要だなと思います。

そこで、この授業者と補助的な役割をする方の事前の打ち合わせというものが大事になってくるということと、今お話がありましたように視覚的に今何をやっているのか、今日どういうことをやるのかというのを見せることによって、万が一音声が少し途切れたとしても、今こういうことを流れるにはやっているのだなということがわかるかと思えますので、視覚的に見せる方法はいろいろあると思えますので、そのあたりが重要になってくるかと思えます。例えば、板書等も黒板に書くだけではなくて、スライドを使って表示するとか、そういう方法もあると思えます。課題となるところとしては、やはり双方向でというところが大きな課題になるかと思えますので、このあたりはいろいろな機器を使ったり、方法をいろいろ考えていくことが重要になるかなと思います。

やはり最後に、この授業が理解していただけているかとか、どうだったかという振り返りの場面や確認のテストのようなものがあると、さらに受講者の方には今日学んだことは何だったかということがよくわかるのではないかなというように感じました。

【遠藤直俊構成員】

先生と受講生とをつなぐサポート役の役割が大きくて、どれだけの手厚いサポートができるかということだと思えますし、今、感想でお話いただきましたが、生徒さんたちの実態も踏まえて、事前に打ち合わせをしておくということはかなり大切なことだろうということも私も感じました。

それから、双方向での実施については、協議会のときもご意見をいただきました。今回は札幌と釧路

を繋ぎましたけれども、できれば、双方向でということだったので、生徒さん同士のやり取りを遠隔でもできるようにすれば、さらに、学習意欲も高まっていくのではないかなということで、これは協議会の方でもご意見をいただいたところで、次へ繋いでいきたいなというところでもありました。

それでは、オンラインの今回の試行実施につきましては、星友館中学校の先生方にも大変ご協力をいただきました。本当に感謝しております。本日、工藤校長先生にお越しいただいておりますので、オンライン授業の今後の可能性も含めまして、星友館中学校におけるオンラインの活用についても、お話をいただきたいと思っております。お願いいたします。

【工藤真嗣オブザーバー】

星友館中学校の工藤と申します。よろしくお願ひいたします。昨年度、それから今年度、オンライン授業の試行ということで協力をさせていただきまして、道教委から派遣いただいている時間講師の先生に、桑原先生もそうですけど、授業をやっていただきました。時間講師とはいえ桑原先生もすごいベテランの国語科の先生でございまして、自分も若い頃同僚として同じ職場で働いていた仲間でございます。そのようなベテランの桑原先生でも、この授業の前はものすごく緊張していらっしゃいました。というのは国語科の指導としてはもう長年のキャリアですけども、こういういわゆる双方向のオンラインの授業というのは、現場では経験がほとんどないので、今後、このオンライン授業を効果的にやっていくための一つの要素としては、そういったところの教員側のスキルアップと言うのでしょうか、配信する側の教員もそうですし、生徒さんのそばにいる先生のスキルアップもすごく大事になってくるように感じております。

それと、昨年度は社会科で、今年度は国語科という形でやってきたので、多分また来年度も同じような試行をやっていくのかなと思いますけど、またちょっと違う教科も、もちろん人事配置にもよりますが、いろんな教科でやってみるということも大事かということを考えているところでございます。

実は本校でも、体調不良で今日休みたいけど、授業は見たい、受けたいというような生徒さんがたまにおりまして、先ほど岩崎校長先生もおっしゃってましたように、いわゆるライブ配信と言いますか、双方向ではなく、ほぼ一方通行の授業を自宅で見られるような感じで、何か困ったときにだけ先生に言ってくれば、先生の方で聞けるぐらいの感じで、日々やっていますけども、やはり専用の機材がないので、教室の方でもタブレットでやっています。本校の場合ありがたいことに、ほとんどの授業で教員が複数配置になっているので、サブの先生が必要に応じて、そのタブレットの向き（カメラの向き）を変えたりしながらやっています。本校の場合は大体メインの先生が授業をやるときに、先ほどお話がありましたけど、どこを示しているのか、プリントのどこをやっているのかわからないというがあるので、書画カメラでプリントを大きなテレビに映して、ここだよと示して授業をやりますが、そういう場合はサブの先生が、タブレットをテレビの方に向けて映したりしてやっています。これもサブの先生がいるからできるのであって、1人だと多分難しいだろうなということと、あと、後ろに生徒さんがいらっしゃいますので、なかなかオンラインの向こう側で見ている生徒さんとのやり取りは、この状況だったらなかなか難しく、今回の試行実施は、配信側には生徒さんはいないので、双方向でやれるかと思うのですが、そのあたりをどうのように整理していくのかとか、あと、難しいのかもしれませんが、お金のかかる話なのですが、専用のこういう会議の機材とかがあれば、何かもっと良いものができるのだろうなと思います。話した人の方にカメラが向いたりする機械というものもあるようですね。そういうのも、もしあれば、もっと楽になったりするのかなということで、その辺の研究や調査のようなものもあ

ったらいいのかなというように思っております。

【遠藤直俊構成員】

実際に、休むけど家で授業を受けたいという方は限られるかと思うのですが、どのぐらいいらっしゃるのでしょうか。

【工藤真嗣オブザーバー】

毎日、大体1人ぐらいいはいますね。1人2人はいます。

【遠藤直俊構成員】

受けてみて、感想というか、わかったとかわからなかったとか、聞きにくかったとかという声は何かありますか。

【工藤真嗣オブザーバー】

特段何かこういうようにしてほしいとかはあまりなく、操作がわからない生徒さんはたまにいて、自分の声が入ってしまったりだとか、そういうトラブルは若干ありますけども、基本的には授業を見られていて、受けられているので、学校に事情があって行けない、風邪とか引いていて行けないときでも、家で授業が見られるというのは、学びという面では価値があったりするのかなと。特段、生徒さんの方から、要望もそれほどなく、またお願いしますという感じで来ているので、ある程度の満足感を得られているのかなというように思っています。

【遠藤直俊構成員】

その他ご意見等あればお伺いしたいと思います。感想でも結構ですが、いらっしゃいませんか。

【黒澤晴一構成員】

札幌遠友塾の黒澤です。よろしく申し上げます。私は、これに参加していきまして、なおかつ、資料1の5ページにあるように、このオンライン授業の意見交換にも参加しまして、細かな点は、そこに音声、画像の見え方、授業のサポートのあり方等でまとめてありますので、これが参考になると思います。それで、その後に私の方で、大雑把にまとめてみました。オンライン授業のライブ配信ということで、授業者側と受講生側のメリットとデメリットを、いろいろ調べながら簡単にまとめてみましたので、まず授業者側ですけど、メリットを4点くらいお話しします。

まず、対面授業と同じような教育ができるということですね。それから、授業者側のメリットとしては質問をリアルタイムで受けられる。三つ目、受講生が理解しているかを確認しながら進めることができる。四つ目、ある意味では受講生と講師が一对一で繋ぐ二者面談も可能である。もう一つ、これは可能だと思うのですが、受講生のメンタルサポートといいますか、そういうこともできるかと思えます。

受講生側のメリットとしては、対面に近い感覚で授業を受けられることができる。二つ目、授業中に質問や意見が言える。ライブですので。三つ目、ディスカッションや受講生同士の交流が図れるということで、ある意味では孤独感が少ない。四つ目、受講時間が決まっていますので、集中力の持続がしやすいということ。最後に、これも可能ですけど、講師と一对一で、ある意味で直接指導を受けられる。

しかし、デメリットもあります。一つは、授業者側のデメリットは、Zoom などの大規模な設備投資が必要だということ。すなわちお金がかかることですね。二つ目、ライブ配信ならではの授業の進め方などの講師のスキルが必要。ライブ配信が目的ではないのです。授業が目的ですのでスキルが必要ということ。それから、これが大きいのですが、この時も少しありましたが、通信環境やツールにトラブルがあると授業が実施できないと。

それから、受講生側のデメリットとして、スケジュールを合わせる必要がある。二つ目、年齢の低い層や高齢者にはツールの扱い方が難しい可能性がある。最後、接続状態が悪いとリアルタイムで受講できない。このように、少し調べてまとめてみました。

同時に、オンラインはライブ配信だけではなくて、オンデマンドいわゆる録画したものもありますが、それもやはりメリット、デメリットがありますから、それをうまく交わせながらできればいいかなと思って、授業に参加したり、あるいはこの意見交換会に参加して、大雑把ですけど自分なりにまとめてみました。

【遠藤直俊構成員】

コンパクトにまとめていただいて、メリット、デメリットがよくわかりました。
木村先生お願いします。

【木村純構成員】

私も、札幌市立大学と看護専門学校で、コロナの中でオンラインだけの授業を2年くらい続けました。生徒もいろんなことがあります。先生が多分一番大変になって、私は生徒の反応が見えないところで話すというのはすごく難しいと感じました。あと、準備は今までの2倍以上かかりました。授業の進行は、今までの半分ぐらいになるわけですね。それで、先生1人1人にも授業の準備とか内容を任せてしまうと、先生はものすごく大変になる。だから、そういうのはやはり学校全体とか教育行政全体で支援をするという、例えばどういう教材を準備したらいいとか、そういうようなことは、先生を支援する体制を作らない限りなかなか難しいのではないかなと思います。

【遠藤直俊構成員】

今のお話でいくと、やはり先生の方の準備ですとか、スキルですとか、それから相手とのやり取りなので、相手の反応というところでは、制限があるというようなことで、このあたりが難しいなと思います。それは裏を返せば、生徒の皆さんにとっては、やはりストレスなく授業を受けられる環境を作っていくことが必要なのかなというように、今お話を伺って思ったところです。

今後も、オンライン授業が楽しく受講できるように、課題解決に向けて、これから何ができるかということ、また一つ一つ解決していきながら続けてまいりたいと思います。予定の時間になったので、協議事項二つ目に入らせていただきます。最後にも何かありましたら、またお聞きしたいなと思っております。

【工藤慶一構成員】

この画面の中に、私もスタッフの一人としていましたが、希望と、本当に準備しなければいけないこ

とが、比較的はっきりしたと思っています。希望というのは、例えば遠友塾に来る受講生の場合、ほとんどパソコンをいじったことはない、スマホも持っていない、そういう中で、ただ興味はある、やってみたい、ということと、それから、たくさんいろんな生徒さんがいますので、学習困難な人もいれば、外国から来て日本語はよくわからない中で受けている方もいるわけです。そういう中で、これがどのように映るかといったときに、よほどもっともっと真剣に反省しつつ、準備しなければいけないことがあると思っています。

例えば、どこをやっているかわからないと、これはよく普通の授業でもあるのですが、対面の場合を見るとわかりますから。あるいは、他のスタッフからの指摘でもわかるのですが、オンラインの場合には非常に困難です。私の隣にいた方は、やはり学習が困難ですので、結局途中で、授業者は反応が確かめられないので、一定のスピードでいくわけですね。そうすると、どんどんどんどん取り残されてしまう。これは、例えば10人の生徒さんがいて、スタッフが隣についても、それは避けられない。

それから、ちょっとしたことですが、配布されたプリントは、片面印刷で3、4枚でしたが、先生が何を言ったかという、裏、裏と言ったんです。それだけでもパニックになるんです。

本当に、木村先生が言われたように、フォローするスタッフの確保と授業者の事前の打ち合わせは絶対必要だと、そして、その授業者には、どういう生徒さんが来るのかという情報もお伝えしなければ、どこに配慮したらいいのかというのは、皆さん違うわけですから。例えば、日本語があまりわからない人に、この授業をしたときにどう見られるのかということなど、とにかく情報交換は絶対必要だと思いました。

【遠藤直俊構成員】

実際に、工藤共同代表には見ていただきましたので、今ご指摘いただいたところは大きな課題だと思いました。

(2) 協議事項 「本道の地域特性を踏まえた夜間中学の在り方について」

【遠藤直俊構成員】

それでは、二つ目の協議に入らせていただきます。

本道の地域特性を踏まえた夜間中学の在り方について、後半、進めてまいります。こちら、昨年11月に開催しました協議会において、広域な本道における夜間中学の設置検討に向けて、各構成員の教育委員会の皆様から、課題や問題点、調査研究が必要なこと等についてご発表いただきましたけれども、その課題に対する対応策などについて、本日ワーキンググループで少し掘り下げて考えてまいります。

前回の協議会で、釧路市教育委員会からは、課題として、もし夜間中学を設置したとしたら、公共交通機関の問題も含めて、通学の問題ということで、発表いただきました。そのあたりをもう少し掘り下げてまいりたいと思いますので、釧路市教育委員会の森次長から、改めてこの問題についてお話しいただきたいなと思っています。お願いいたします。

【森康枝構成員】

前回の協議会で、釧路市で夜間中学を設置した場合の課題としましてお話させていただきましたが、釧路市の場合は、主な市内の公共交通機関がバスになりまして、だいたいバスの最終便は20時台で終わってしまう、地域によっては19時台が最終のところもある状況です。このような地域事情で、夜間

中学で授業時間、スケジュール、時間割の設定ですとか、通学に関して課題があると考えております。

【遠藤直俊構成員】

やはり札幌市近郊までは対応できるかもしれませんが、それ以外の地域になると、夜間の授業ということであれば、帰りの交通手段の問題というのは必ず出てくるのかなと思っております。

今、釧路市から発表いただきましたけれども、生徒が通学する手段として、公共交通機関が遅い時間がないという場合に、授業設定についても考えていかなければならない問題かなというように思いますが、事務局の方でもその課題意識もあり、少し情報収集をしていますので、他県の状況等も含めて、資料に基づいて説明をさせていただきたいと思っております。

【事務局：上野課長補佐】

資料2をご覧ください。他県の夜間中学における授業時間等の設定について、2023年度第69回全国夜間中学校研究大会資料及び各学校のホームページを基に、特徴的な授業時間等の設定を行っている学校について、まとめたものです。

まず、「1 授業時間の前後に補習や自主学習等の時間を設け個々に応じた対応をしている学校」について、いくつか紹介します。1つ目の丸、埼玉県川口市立芝西中学校陽春分校では、始まりの会の前の16時30分から17時25分までの時間と、帰りの会の後の20時50分から21時25分までの時間、授業の補習・受験対策など様々なニーズに応えるため、学習会を実施しております。2つ目の丸、千葉県市川市立大洲中学校では、学活の前の16時30分から17時10分までの間を、学習相談の時間として、個別の学習支援を行っており、多くの生徒がこの時間に来てそれぞれの課題に取り組んでいます。2ページ目、1つ目の丸、神奈川県相模原市立大野南中学校分校では、学級活動の前の16時25分から17時10分までの間を、始業前授業として、希望者に教科学習の補習と日本語指導を実施しています。3つ目の丸、奈良県橿原市立畝傍中学校では、1限目の前の15時から16時30分までの間を、課外学習として、仕事や家庭、健康上の理由で夜の時間帯に通学ができない生徒のために、毎日、課外の学習を実施しています。4つ目の丸、広島県広島市立観音中学校と、5つ目の丸、二葉中学校ですが、どちらも高校進学を目指す生徒に、観音中学校では、午後2時50分から2時間の授業を実施。二葉中学校は、午後の補習等を実施する学校です。

次に、「2 早い時間から授業として行っている学校」です。神奈川県横浜市立蒔田中学校では、ホームルームの前の16時から16時40分までの間、1時間目として、日本語指導、宿題、行事の準備等、学年を越えた活動の時間としています。3ページ目、今年の4月に開校予定の鳥取県立まなびの森学園では、はじめの会の前の16時45分から17時25分までの間、0校時として、個別学習や、早く帰る生徒のために、4校時目と同じ授業を行う予定としています。以上です。

【遠藤直俊構成員】

他県、他校の状況について、情報提供させていただきました。時間が制約される中でのことなので難しいところもあると思いますが、構成員の皆様から、様々な角度で対応策等についてご意見をいただきたいと思っております。工藤共同代表、この件についてはいかがでしょうか。

【工藤慶一構成員】

一番悩ましい問題です。様々な個人の事情がありますので、どこに住んでいるのか、どんな職場から通うのか等々の問題が、全部重なってきます。それで、特に釧路の場合は、雪はそれほど多くないですけど、浜風で路面が凍ってしまうという問題があって、釧路市内に住んでいても通えない人が出ることで、釧路の現場では、それが非常に悩ましい問題としてあります。

もし仮に、釧路で公立夜間中学を開設するとしたときに、これはもちろん事前調査が必要ですけど、基本的に、学校の拘束時間を午後2時から午後6時までとかという考え方もできるのではないかと思います。夜間中学は昼間やってはいけないという法律はありませんので、釧路の場合は、そういうことも検討しつつ、なおかつ、特に働きながら通う人もいますので、その場合に、そういう方々の学習保障をどうするのかということも合わせて考えるという、2段階で考えていくような方策が必要ではないかと思っています。

これは、実は、大なり小なり、札幌遠友塾でも星友館中学校さんでも同じような問題があると思います。遠隔地から通う場合、それから車椅子で通う場合、年配の人が通う場合、特に今年は、雪とかの関係で、遠友塾の各クラスで骨折者が出て、しかも足を骨折するとかということになって通えないという問題があって。通学が可能であるということは、実は義務教育を保障するための一つの大切な条件だと思っています。

あとは、自主夜間中学の場合には、通学費用は敬老パスがあれば良いのですが、敬老パスが変わりそうだと今焦っていますが。それから、全国と比較してやはり北海道の宿命は、冬期間の約5ヶ月間をどう乗り切るか。現在でも大雪が降ったら、やはり生徒さんは半分ぐらいになってしまう。しかも夜ですから、家族からおじいちゃんおばあちゃん行かないでと言われますので、そういう問題とかが全部重なってきます。自主夜間中学の場合には全部それを背負わなければならないので、特に今、望みたいのは、釧路のような場合は、午後の一定の拘束時間に、夜しか来られない方にどう保障するかという、これを二本立てで、アンケートを取る段階からそれを調べる必要があると思っています。

しかし、これは北海道の各地域で、似たり寄ったりの問題もあるし、その地域の特性というのもあって、それに合わせてやらないと、1人も取り残さないという目標があるとすると、それは、努力しなければいけないと思います。何らかの工夫をしていかないといけないと思っています。

星友館中学校にも、苫小牧から通っている方がいて、結構大変という話も聞いています。遠友塾には昔、釧路や函館から通っている人もいましたから、そういうことを考えれば、大変ですけど、もちろん毎日通うことはできませんけど。だから、通学ができるということは、とても大切な問題だと思っています。

【遠藤直俊構成員】

個々の事情が違うということ、それから地域性、北海道の場合は季節的なものがあるということで、あとは働いている方の学習保障ということを見ると、時間設定はなかなか難しいと思いましたが、具体的な時間も提案いただきながら、ご意見をいただきました。

【工藤慶一構成員】

一つ付け加えると、その0校時ってありますよね。それは、四国の三豊の中学校では、不登校の特例校ですので、実はこの0時間を若い人達、不登校特例で来た方には、これを1時間目にして、二段構えの構成になっています。

【遠藤直俊構成員】

岩崎校長先生、ご覧いただきて何かご意見ありましたらお願いします。

【岩崎弘之構成員】

高等学校も、学区とか、そういった問題、課題もあって、かなり広範囲から公共交通機関を使って来ると、本校の場合は自転車で通学している生徒は、おそらく他の公立高校よりも少ないのではないかと思います。吹雪等でJRが止まると、生徒の足が止まるということで、幸い、札幌に隣接しておりますので、朝は6時台から夜は日付が変わるまでは電車が動いてくれています。

ところが、今お話を伺ったとおり、釧路で19時台の最終とかということになりますと、自転車か徒歩、自動車で、冬のしばれる中をとすることを考えると、私がおじいちゃんの家の子であるならば、おじいちゃん今日やめておいた方が良くはないかと言いたくなるなという気持ちは十分にわかるなと思いました。そういう意味では、今、工藤共同代表がおっしゃっていた通学の確保といいますか、時間帯もそうですし、気候ですとか、そういったものを考え合わせるということが非常に大事だなということを、再認識というか気づかされたというように思っています。

【遠藤直俊構成員】

木村先生、この件については何かございますか。

【木村純構成員】

皆さんの言ったとおりで、やはり地域ごとに考えなければいけないということが、すごく大事なことだと思いました。

【遠藤直俊構成員】

この件に関してご意見等をお持ちの方がいらっしゃいましたらと思いますが、だいたい、まとめて工藤共同代表からお話いただいたことが、核心のところだろうと思って聞かせていただきました。

それでは、時間の関係もございます。次の協議ということで、旭川市教育委員会からは、夜間中学に関して調査研究をするに当たって「特別な教育課程を組むことに関して」と「学校を休んでいる生徒への関わり方」という2点のテーマをいただきました。各学校のホームページにはこのあたりはあまり詳細には出せないところかなと思いますので、ワーキンググループにおいて情報共有できたらと思います。不登校の児童生徒ということにも関わってくると思いますけれども、旭川市教育委員会の田村主幹から、まず、特別な教育課程について説明をお願いします。

【田村貴史構成員】

今日は深掘りするというので、多面的にいろいろ知れたらと思っているところです。夜間中学には、小学校段階の学習内容の理解について、課題がある生徒さんがいらっしゃるのかなと思っています。その生徒さんに対してどのような教育課程や手立ての工夫をされているのかをお聞きしたいと思います。よろしく願いいたします。

【遠藤直俊構成員】

星友館中学校もコース分けという形で授業を行っていること承知しておりますので、日本語の勉強ということもありますし、小学校の学習内容を教育課程に入れることも可能ですし、中学校、それから高校進学を希望される生徒さんには、そういった指導も必要かと思えますけれども、学校、それから個々の状況で難しさがきつとあるのだらうなというように思えますけれども、工藤校長先生から、その辺りの学校の取り組みの状況についてお話しただけででしょうか。

【工藤真嗣オブザーバー】

せっかく資料3がお手元にあるかと思えますので、資料3をご覧いただければと思います。

開校の前の年から、1年目の生徒募集を始めて、入学希望の方と、どの段階から勉強を始めたいですかというようなお話を伺っていたときに、結構、小学校段階からの学習内容がちょっと理解できていないとか、実際小学校も通うことができなかつたという方が多数いらっしゃったものですから、これはもう小学校段階からの学習は絶対必要だろうということで、資料3に6コースと書いてあります。そのうちの一つ目の「日本語」は、外国から来られた方で、日本語の読み書き、会話もちょっと難しいような方のために設けたコースということで、週20コマある授業のうち週10コマを日本語の時間に充てているようなコースになっているのですが、その次の「スタート」コースから「チャレンジ2」というコースまで、今年度は、日本語コースを除くと五つのコース、要するに日本語コースを合わせると六つの教育課程、カリキュラムを組んで授業をしております。

「スタート」コースは、一番やさしい学習で小学校の段階でいうと3年生ぐらいからの学習になっています。算数で言うと2桁の足し算ですとか、そのあたりからやっている、場合によっては、掛け算の九九の復習から入っているような場合もございます。

そして、「ベーシック」の段階で、小学校4年生、5年生ぐらい、「スタンダード」で5、6年生から中1ぐらいにかけてのレベルです。

1年目は、その上「チャレンジ」コースというのがあって中学校の段階ということだったので、2年目になって、去年1年目にチャレンジコースを受けた方から、チャレンジより上がないのでチャレンジコースということになるのですが、違う内容の学習をしたいというような希望があって、今年度は「チャレンジ2」というコースを作ってチャレンジではやらない教育カリキュラムを単元をやるというような形で設定をしております。とにかく、週20コマしかないですし、小学校段階からやらなければならないので、学習指導要領に定められている内容全部をやることはもう初めから無理なので、大事なところを中心にピックアップしてやるわけですが、なかなか学ぶという機会から離れていた方もたくさんいらっしゃるの、本当に丁寧にやっていかなければならないということで、ゆっくり、じっくりこうやっていくということ、場合によっては座学の授業の場合は、教科書は国の方から小学校も含めて無償給与されますけれども、その小学校をかみ砕いた形の学習のプリントを各先生方で作って、授業をしているような状況でございます。

つまり、入学を希望されて集まってこられた生徒さんの学びの状況をできるだけ把握して、それに合わせたカリキュラムを作るということが一つと、そうなるとどうしても小学校段階の勉強ということになると、小学校での指導経験のある先生もいらっしゃった方が絶対良くて、私のように中学校しか経験のない者だけでは駄目で、小学校の本当に丁寧な指導をされてきた先生と一緒に、やっていくことがすごく大事になってくるというように思っております。

【遠藤直俊構成員】

事務局の方で、他県の特別な教育課程の編成の状況について少し調べたものを取りまとめました。資料3になります。事務局から説明をさせていただきます。

【事務局：上野課長補佐】

資料3をご覧ください。この資料は、2023年度第69回全国夜間中学校研究大会資料及び各学校のホームページを基に、教育課程の工夫をしている学校として主に習熟度別を取り入れている学校をピックアップしてまとめたものになっております。

現在、全国に44校公立夜間中学校がありますが、札幌市立星友館中学校をはじめ、多くの学校で、学年に関係なく習熟度別にコース分けやクラス分けをした学習が行われております。

その中でも、学習経験の差がある技能教科以外の教科を習熟度別に分けて授業を行い、技能教科は、合同授業や学年に関係なく全員で行う学校が多い傾向に見えました。

習熟度別に授業を行う学校の中でも、特色がみられる事例としまして、18番の兵庫県尼崎市立成良中学校琴城分校は、日本語、数学は5クラスに分けて、社会、理科、英語は4クラスに分けてといったように、教科によってクラス編成を変えており、体育、音楽などは全校一斉で授業を行っている学校です。

16番の同じく兵庫県ですが、神戸市立丸山中学校西野分校は、学力や日本語力により習熟度別の6クラスに分けていますが、年度途中でもクラス編成の見直しができるように、6クラスとも同じ時間割となっています。以上になります。

【遠藤直俊構成員】

夜間中学における特別な教育課程の工夫については、カリキュラムの問題なので、なかなかこれも難しいところもあるかと思えますけれども、皆様からご意見、考えられていることなど、お聞かせいただきたいと思いますが、自主夜間中学におきましても、受講生の習熟の程度ですとか、求める学習に応じて組んでいくというようなことを大切に取り組みされていると承知しておりますけれども、黒澤代表、このあたりいかがでしょうか。

【黒澤晴一構成員】

趣旨に合っているかどうかわかりませんが、札幌遠友塾が年間の授業をするにあたって実施していることを簡単にお話します。

現在は、受講生さん65名、スタッフ75名です。毎週水曜日、夜間2時間、50分授業です。4クラスございます。じっくりクラス、1年、2年、3年です。教科は、国語、数学、英語、社会です。各教科部会を設定して、教科会議で年間計画を作成します。卒業までに中学1年生程度の学力の定着を目指しております。例えば、数学は、足し算、引き算から1次方程式位までです。また、定期的に教科部会を実施しております。毎週授業後にはクラスミーティングを実施して、その日の授業の内容、展開、受講生さんの反応などの振り返りをします。

緩やかではありますが、いわゆるPDCAサイクル、プラン、ドゥー、チェック、アクションを目指しております。振り返りは、毎週、その都度、全スタッフに共有されます。このようなポイントです。

各クラス全部全員のスタッフに毎週行き渡るようにしております。例えば、例として、昨年の11月1日の3年生国語の部分を紹介いたします。題材は夏目漱石の小説『こころ』。授業者の振り返りの発言要旨は、「プリント量が多く、3回の授業では8割くらいの完了だった」「中学生の小説の読み方に

従って進めたが、受講生さんはどれくらい理解できたか」に対して、スタッフからは、「量が多く、進め方が早いと感じる受講生さんがいた」「難しい内容だったが原作に興味を持つ方も数名いた」「小説に興味を持ってもらうアプローチとしては良かったのではないか」「個々の受講生さんの理解力に差が出た感がある」「遠友塾の勉強内容に沿った教材なのか」などでした。

1年クラスから3年クラスまでは、一斉授業を基本としていますが、受講生さんの習熟度や状況を考へて、一対一、あるいは一対複数の個別学習を主にするのが、じっくりクラスです。このクラスでは、国語と数学については習熟度に応じた個別学習です。英語、社会は一斉授業です。個別学習による学習成果は大きいと思いますが、一斉授業の良さもあります。それは、いろいろな人がいて、いろいろな考え方があって面白い、いわゆる多様性の尊重です。そして一緒に学ぶことが面白い、いわゆる協働的思考ができます。また、コミュニケーションする力も育つと考えます。12月には、受講生さんがまとめとして、アンケートによる5段階評価と、言葉による感想をいただきます。項目が3点。「授業は楽しく面白かったですか」「内容はわかりやすかったですか」「プリントは見やすかったですか」この結果を集計して、各クラスで協議して、スタッフ全体で共有、そして次年度へのフィードバックをしています。この資料はその授業の振り返りのもので、全て網羅されております。すなわち、これらをもとに、年間計画、そしてカリキュラムの作成にあたっています。簡単に言いますと、日々の積み重ねの検証が大事と考えますし、やはり、それが一番大事かなと。常に反省しきりですけど、そういうことをしております。以上紹介です。

【遠藤直俊構成員】

札幌遠友塾の教育課程について説明をいただきました。PDCAのマネジメントサイクルということで進められていますので、今の説明でも非常に計画的、系統的に組まれているということがよくわかりました。

その他、この特別な教育課程のところでご意見等がありましたら、お話ししたいと思いますが、いかがでしょうか。

【工藤慶一構成員】

全国に今、約50の自主夜間中学があります。札幌遠友塾は、基本的に一斉授業の形式をとって、個人のフォローのために中に入って、各クラスの生徒さんの人数と、スタッフの人数がほぼ同じというスタイルがあります。ほぼ、それ以外の自主夜間中学は、全て1対1です。生徒さんが100人いれば100人スタッフがいる。一番多いところは、生徒さんが300人いて、スタッフも300人いるような自主夜間中学が2つあります。

札幌遠友塾の場合、なぜ今の形式になったかという、一期生のときに、スタッフが10数名しかいないのに生徒さんが100名来ました。そうしたら、もう、個別にどうこうということではなくて、とにかく今いるスタッフは全部フォローに入る。それしかやりようがなかったのです。その代わり、授業内容についての検討がスタッフ相互間でできるようになる。これが、他の自主夜間中学は全部1対1でやっていると、50人、100人いたら、100人の相談をしなければならない。これがなかなかできない。ということは、どういうことになるかという、個人技になります。この生徒さんにこのスタッフという組み合わせが、合っているかどうかはわからない。しかも、そのやり方が人によって個人技になるということで、反面の問題点もあります。ただ、遠友塾の場合、一斉だとやはり駄目なので、じっくりク

ラスを作ったというのは、やはり個別も必要だという明らかなことがありましたので、そういう形ですよ。

実は、先々週と先週、今、私、1年生を担当していますが、割り算の計算で「商を立てる、かける、引く、おろす」と言いますが、今回、遠友塾30年で初めて出たことは、立てる、かける、引くまでは計算で、おろすという操作が、ある生徒さんが、これは何かの計算だろうと思って、おたおたしてしまったのです。それと、その方が、それは何とかわかった、しかしひき算の仕方を今度忘れてしまって、それでまた一悶着というようなことがありました。本当に個々人にとって、わかるとは何かということを実際にやっていくと、実は、小学校段階の問題はすごく難しいです。遠友塾では例えば、1、2、3を「いち、に、さん」と「ひい、ふう、みい」と何で二つの言い方があるのかということから始めますので、要するに、得意な人も不得意な人も惹きつけるような授業を目指していますので、それでないと多様な人が一緒にいますから。その中で何とか、個人的なフォローを繰り返しながら、じっくりクラスの場合は本当に基本的に1対1です。その代わりに、1人の生徒さんに2～3人がかりでプリントを検討してやっていますし、振り返りも大変です。でもそれをやらないと、おそらく飛ばしていく授業になると思います。私達、遠友塾の場合には、そういう意味でテストは要らないです。テストが必要なような授業をしていません。生徒さん1人1人と密接にやっていくとわかりますので。「宿題」ではなく、お土産とかお歳暮とかお中元というような表現でやり取りをしながら、しっかりフォローできると思ってやっています。

【遠藤直俊構成員】

遠友塾の取り組みについて補足もいただきました。

それでは、最後のテーマになります。旭川市教育委員会からもう一つ、学校を休んでいる生徒への関わり方ということで、説明を田村主幹からいただいてもよろしいでしょうか。

【田村貴史構成員】

先ほど工藤校長先生がお話の中で、「楽しい授業」というパワーワードを出してしまっていて、やっぱりそうだなと思っているところでした。ただ、一方で夜間中学校でも籍は置いていても休んでいる、いわゆる不登校生徒もいるのかなと思うのですが、答えられる範囲で構わないので、どのぐらいの割合がいて、どのようなアプローチをしているのか、可能な範囲で教えていただけたらと思います。

【遠藤直俊構成員】

星友館中学校の状況ということなので、これもお話しできる範囲が多分限られると思いますけども、その範囲でお答えいただけるでしょうか。

【工藤真嗣オブザーバー】

現在、在籍者106名ですが、様々な事情のある方なので、この106名が全員登校するという事はもうほぼなくて、実際、特に若い方は不登校経験者ですので、なかなか学校に通うパワーとエネルギーと言うのでしょうか、これが常に溜まっているわけでもないということなので、結構欠席されている方は多いです。またそれとは別に、お仕事の関係ですとか体調の関係ですとかでお休みされている方もおります。特に不登校の関係に絞って考えますと、夜間中学であるがゆえに、あまり無理をしないでマ

イペースで学べるようなことを大事にしています。だからこそ、原則6年間在籍可能というような形で、自分のペースでゆっくり学べるような体制をとっているというところがございます。また入学の段階でも、毎日通えませんかという理由で入学を断ってしまうと、もう行き場がないというか。もちろん入学条件はありまして、中学校の時に十分学べていた方はご遠慮いただいておりますが、学べていない方は少なくとも、初めからもう全然通えないけど入学したいというのは難しいですけど、入学したいという気持ちがある方は、基本的に入学をお認めしているような形です。勉強してみたい、学校に通ってみたいという思いを大事にして、入学をお認めしています。

でも、実際学校が始まったらなかなか足が向かないという方もいらっしゃると思います。それでも、少しでも学校と繋がりながら、本校で在籍しています。

また、時期もあります。学校に来られる時期と来られない時期とかがあるので、それを通算6年間で考えたときに、うちの学校で学んでよかったと思ってもらえたらいいのかなということで、要するに無理をしないで、自分のペースで通うということを進めております。

昼間の学校ほど登校刺激ということはしてなくて、時折連絡を取ったりしながら様子を聞いたりしているうちに、例えば、少しオンラインで授業を見てみようかなとかいう気持ちにもなってきたりしますので、そういう形でやっています。

また、6年間は結構あるようで短い部分もあるので、これも考え方なのですが、体調不良ですとか、条件が整わないで学校に通えないという方は、一旦自主退学していただいて、また体制が整ったら再入学できますので、そのようなこともして、ある程度長いスパンで、在籍が可能となるような工夫も考えているところではあります。そのような形で、無理をしないでやっているという状況でございます。

【遠藤直俊構成員】

義務教育段階は、小学校、中学校で不登校も含めて欠席児童生徒に対しては、かなりエネルギーを使って対応されていると思います。

伊藤校長先生、この辺りはかなりご苦労されていると思いますけど、今、星友館中学校のお話もありましたので、中学校の状況も含めてお話しいただければと思います。

【伊藤仁弥構成員】

自校の状況でございますが、本校は300人ぐらいの生徒数で、そのうち完璧な不登校だけでも20名余り。その類いを含めるとかなり出てきて、そうすると全校生徒の9%ぐらいが、そういう生徒かなという感覚です。それで一つ言えるのは、今も話題になりましたけれども、実際いじめが原因であるというのがほとんどないのです。もしかしたらいじめが原因となったときには、解決の手段が見つかりやすいのですが、そうではなくて小学校のときから不登校であったり、あるいは家庭環境が大きく起因しているのが一番多いのです。学習内容がわからなくて、中学校に入学する生徒もいるかもしれません。でも逆に学習内容がわからなくても堂々としている生徒がいて、そこはまだスタート地点がしっかりと築けるかなと思います。それで生徒を見ていまして、学校に無理矢理足を向けるという考え方ではなかなか難しいなと思っています。

でも、中学校を卒業した後、どこかで気づいたときに繋げてあげられる、そういう精神状態に何とか持っていったらなという部分が大きいのだと思います。実際に卒業した後の生徒を見ていても、実は家庭環境的な起因しているものがあつたけど、でもある程度の年齢になりますと、たくましく就労している生

徒がいます。そういった子たちも、もしかしたら学べるのではないかという気になったときにその入口になりやすいと思います。

それが持続的なものにならないかもしれないけれども、でもそれが義務教育段階で、そのように担任なり、職員がアプローチしていると、やはりずいぶん違うことが多いと思います。

ですから、学校に足が向かなくても、卒業後も君の将来を憂いているし、絶対どこかでチャンスを持っていただきたいというような、そういう姿勢で3月を迎えるというか、そういうことを、何とかやり続けて、その後の人生に繋がりたいという、その一心で取り組んでいるところです。

【遠藤直俊構成員】

次に、PTA 連合会の廣瀬副会長から、保護者の立場、それから家庭環境というお話も今、伊藤校長先生からありましたが、この辺りからご意見いただけるでしょうか。

【廣瀬堅一構成員】

PTA という立場で前回もお話を少しさせてもらいましたけども、今、伊藤校長先生からのお話にもあったように、今の子どもたちの学校に行かないという理由の一つは、勉強について行けないという、要は、いじめは本当にごく一部で、その前にその環境に馴染めない子が一番多いと思っています。昔の話をしてしまうとよくないのかもしれませんが、昔の僕たちの時代の親は、多少後ろからでも行ってこいという感じで、背中を押すというか、ちゃんと学校行きなさいという感じで声をかけてくれましたが、今の保護者の皆さんとちょっとお話しする機会が結構あるのですが、学校に行かなくてもいいのではないかと、というようにお考えの保護者さんが昔より多いと思います。無理して、そんな嫌なところに行かなくていいよ、だったら家にいなさいよというような環境で、別な勉強する方法が今はあるのではないかと。例えばオンラインであったりネットであったり、いろんな情報が入ってくる方法がありますので。また、中には、僕の知っている子どもで仲間のお子さんが不登校で、小学校、中学校に1回も行ってない子がいます、実はその子がパソコンなどに非常に長けている、もう僕もついていけないぐらいのそういう子も中にはたくさんいて、実は普通に社会人になられたということも実際あります。やはり一概に、学校に行かなければならないということで、何でもかんでも押し付ける時代ではなくなってきたのかなと思います。僕も初めてこういう立場になって感じている状況です。先ほど皆さんが言われたように、やはり、学習指導要領もあって、一対一でケアもしなければならぬ、準備もたくさんある今の時代、来てくれる子どもたちに100%対応しなければならない上に、来ない子どもたちにも対応しなければならない。

以前は、例えば電話したり家庭訪問したりして、ちょっと出てきてみないか、ちょっと参加してみないかという声をかける時代もあったと思うのですが、この5年前からのコロナで1回そういうご自宅への訪問などもできなくなってしまって、一気にまたその後から不登校というのは増えてしまったような感じが多いと思います。

そういう意味で、先ほどのいろんな地域で行けないところもあるなど、いろいろ事情があるというのがありますが、やはり、保護者側というか、地域としてそういうのをサポートしていくようにしていかないと、全てが全て先生方の方になってしまうと、なかなか解決の方向には向かないのではないかなということで、見方というか考え方、僕たちも含めて周りにいる保護者も含めて、考え方を少しずつ変えていかないと、なかなか前に進んでいかないのではないかとこの今日も感じました。

【遠藤直俊構成員】

我々も含めて、ちょっと意識を変えていくということも必要なのかなというように感じました。

お時間の方が迫ってきておりますが、その他、この件についてご意見があればお伺いしたいと思います。最後のご発言になろうかと思いますがいかがでしょうか。

【工藤慶一構成員】

遠友塾にも若い方の場合困難が伴います。本当に来るときは来る、来ないときは来ない。ただ、私たちは常に本人との連絡は絶やさないとことをしています。それでもやはり来られない時が多い。あとそれから、四つのクラスごとに学齢期の子たちも来ております。その中でも本当に元気になる子もいます。その彼らの笑顔を見ていると、やはり夜間中学も一つの選択肢になるように思います。実は、道内の義務教育未修了者が5万8444名という数字ですが、中卒の人数が約63万人います。この中には入学希望既卒者とされている人に該当する、いわゆる形式卒業の人が結構いるのではないかと。そこで、行き場がないときに学びたいと思ったときに受け皿として公立夜間中学もあるのではないかという気がしています。おそらくその流れはこれから加速されると思います。

これは、私が星友館中学校から学んだことですが、星友館の生徒さんと話をすると、確実に養護教員とスクールカウンセラーが非常に大きな役割を果たしている。これは驚くほど。カウンセラーの人と会える機会がなかなか来ないとか、養護教員の部屋にいつも2、3人いるとか、それから廊下で勉強しているとか、いろんなパターンがあります。

だから先生方は大変苦労されているのですけども。その中でもやはりスクールカウンセラーと養護教員の在り方について、本当にこれは力を入れるべきだと思います。

【遠藤直俊構成員】

限られた時間でしたので、まだまだお話を聞きたいところもありますけれども、今回も本当に参考となるたくさんのご意見をいただきましてありがとうございます。私なりに、やはり夜間中学ですとか、それから学びを求める方々への学習機会を保障するということからすると、一つはやはり体制上の問題があるのだろうなと思いました。

教育課程にしても、通学手段もそうですけれども、やはりそういったものも一つずつクリアにしていかなければならないなということが改めて今日わかりましたし、何よりもう一つは、個々の状況、個に応じたというところが、かなりきめ細かく対応をされていることもお聞きしましたので、今後オンラインの活用も含めて、ぜひ生徒さんがやはり勉強することは楽しいと、よくわかる、学校に行きたいというような、そういった形を作っていくことが必要なのだなということ、改めて今日私自身も学んだところです。今後も検討に向けて、今日大きな示唆をいただきましたので、さらに前に進みたいと考えております。今日はありがとうございました。

以上で、第3回の夜間中学校等に関する協議会ワーキンググループを終了いたします。次回の開催については、未定であります。今後協議において、一つ一つ議論を深めてまいりたいと考えておりますので、皆様どうぞ引き続きよろしくお伺いしたいと思います。

本日は本当にご多用のところお時間をいただき、貴重なご意見いただきました。

ありがとうございました。